

美術の窓(161)

河村岷雪画『百富士』と歌川広重の名所絵

大和文華館館長 浅野秀剛

私は河村岷雪『百富士』(1771年刊)に関連したことを、「美術の窓」で3回も採り上げた(155,158,160)。そのうえまた、というのは我ながらしつこいと思うが、これで打ち止めとするのでどうか勘弁願いたい。

『百富士』は、絵は素人と言う河村岷雪(?~1777)が描く102の富士山図に賛を添えた絵本である。確かにうまくはないが、描かれた富士山図は、ほとんどが自身のスケッチを元に制作されたと推定できるものである。その図像は抜群に新鮮で、その後の多くの絵師に影響を及ぼした。その一人が浮世絵の名所絵を大成した歌川広重(1797~1858)であり、広重の絵に、『百富士』の影響と思われるものは少なくない。

『百富士』の「駿河町」(図1)は、下方に駿河町の屋根と木戸の上部だけを描き、江戸城の石垣と城の一部、そして富士山を重ねる大胆にして奇抜な構図である。駿河町の先にあった本両替町や大屋敷などはすべて省略されている。駿河町から西を見ると、正面に富士山が見えるということが当時広く知られていたのだ、それを踏まえたうえで、類型化を避けたと考えられるものである。『百富士』以降に他の絵師によって描かれた「駿河町」図も、すべて富士山と組み合わせたものであり、広重も数点描いているが、画中に人物を描かなかったものはない。ただ、『絵本江戸土産』五編(1851-52頃刊)(図2)だ

けは、路上を描かずに、町木戸、三井越後屋の看板と富士を組み合わせている。人物はといえば、わずかに頭だけを下辺に並べている不思議な図である。広重は、『百富士』の「駿河町」を念頭に置きながら、それとの差別化を図ったと思われるが、同時に、北斎の作品との差別化も意識したのであろう。北斎の作品とは、「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」(図3)である。北斎も、『百富士』を踏まえて路上の人物を描いていないが、屋根瓦職人と風を配して、『百富士』とは全く別の趣を演出している。

『百富士』の「御茶水」は、左に神田川と上水道の懸樋、右に昌平坂と聖堂を描き、左上に富士山を配した図である。御茶水の水、上水道を俯瞰的に描いた図は、この図が嚆矢と思われるが、同時期に刊行された鈴木春信画『絵本続江戸土産』(1768年刊)に「神田上水御茶水」図があるので、その頃には、御茶水の水の景観を愛でることがかなり広まっていたことが分かる。『百富士』の「御茶水」を踏まえた作品として早いのは、司馬江漢の銅版画「御茶水景」(1784年)で、視点の高さが目線に近く、懸樋を東から捉えて真横に見ている点は異なるが、ほぼ同じ図様となっている。その後、文化(1804~18)頃の昇亭北斎は「東都御茶之水風景」(横大判錦絵)で、『百富士』の「御茶水」を江漢の銅版画で修正し、低い視

点から懸樋と富士山を捉えて谷の深さを強調した図様を作る。そしてそれが御茶の水図の定型となって広重に受け継がれていく。広重の御茶の水図は懸樋を中心としたものが多い。最晩年の「名所江戸百景 昌平橋聖堂神田川」は、懸樋を描かずに昌平橋を入れているが、大筋では『百富士』の発展形と言えるものである。

『百富士』が広重の作品に与えた影響で最も直接的なのは、高年の「不二三十六景」(横中判錦絵、1851-52年)である。その挿物は、構想の基礎に『百富士』があると思わざるを得ないのであるが、それは措くとして、直接的に影響を指摘できるものだけでも「武蔵野」「東都永代橋佃島」「東都木下川田甫」の3図ある。

「武蔵野」は、『百富士』の巻頭にも置かれている図で、武蔵野図屏風のイメージを写したものであるが、それを広重も「不二三十六景」に入れた。私はそれを広重のオマージュと考えている。岷雪と広重とでは絵師としての総合力にかなりの差があるが、広重は岷雪の発想の自由さ、図像の新しさに敬意を表していたと思っている。

『百富士』の「永代橋」(図4)は、永代橋の北東上空から南西方向に俯瞰した図で、橋の西詰の家屋の上に富士山が見え、左下には屹立した帆柱が描かれている。帆柱は隅田川河口に滞留する帆船をイメージしたものであろう。橋と帆柱を左右に配したバランスが良く、集中の好図といっている。私は、江戸後期の永代橋図に帆船(帆柱)が組み合わせられることが多くなったのは、『百富士』の「永代橋」図の影響と

考えている。歌川広重も多くの永代橋図を残していて、帆船(帆柱)と組み合わせられた作品も多いが、『百富士』の「永代橋」と同じ構図の作品は一点を除いてない。その一点が「不二三十六景 東都永代橋佃島」(図5)である。しかし、一つ引かかるのは、広重が「東都永代橋石川島」ではなく、「東都永代橋佃島」と記していることである。永代橋から南を見た場合、目の前に見えるのは石川島であり、佃島ではない。永代橋から眺めると、佃島は石川島の南隣に位置しているの、船の帆柱など高いもの以外は見えない。詳細は省かざるを得ないが、19世紀には石川島と佃島が繋がったこともあり、浮世絵版画などに出てくるのはすべて「佃島」で、「石川島」の名は消えてしまうのである。

「東都木下川田甫」は、『百富士』の「小松川 葛西」を下敷きにした図と考えてよい。岷雪は、「小松川 葛西」において、一面に広がる田甫と富士を組み合わせた図を描いた。それは見事な図とは言えないが、新奇な組み合わせであったことは確かである。それが広重の念頭にあって、小松川の北西にあたる木下川の地名を取って「東都木下川田甫」を制作した。したがって、「東都木下川田甫」は、「小松川 葛西」と図像が類似するとは言えないが、強い影響のもとに成立した図と考えられる。

「不二三十六景」の後、広重は「富士三十六景」(大判錦絵)、そして「富士見百図」を制作し、共に亡くなった翌年に刊行されるが、それらは、「不二三十六景」をベースにした作品であり、『百富士』との関係は随分薄くなっている。

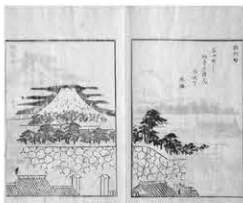


図1 国文学研究資料館蔵

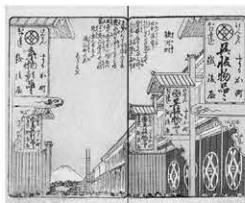


図2 国文学研究資料館蔵

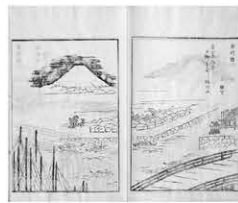
図3 山梨県立博物館蔵
「北斎と広重 ふたりの富嶽三十六景」2007、より複写

図4 国文学研究資料館蔵

図5 山梨県立博物館蔵
「北斎と広重 ふたりの富嶽三十六景」2007、より複写

季刊 美のたより No.219

令和4年7月1日

発行 大和文華館